

常識の規範的影響について^{1), 2)}

石井 徹 (島根大学法文学部)

A study of the normative influence of common sense

Tooru ISHII (Faculty of Law and Literature, Shimane University)

Regulative functions of common sense seem to be an interesting phenomena worth investigating, but very few studies have addressed the matter. In this article, we discussed the normative influence of common sense from the perspectives of both common sense as knowledge, and common sense as a norm. A review of the literature was conducted from these perspectives, reflecting upon how they apply to real life. In particular, we discussed the latter perspective with respect to its significance, suggesting research approaches, and raising future directives for research. After reviewing the concepts involved in the study of normative influence of common sense, we discussed the potential contribution of such studies toward our social lives.

Key words: common sense, anomaly, normative influence, acceptance & rejection, stability & change

キーワード：常識、変、規範的影響、受容と拒否、安定と変化

本稿では常識の規範的側面について、その重要性と探求の意義を常識研究と規範研究の双方から検討する。まず、常識の知識としての側面と規範としての側面を従来の研究に確認し、日常における両側面の現れ方を振り返る。さらに後者の規範的側面についてこれまで明らかにされてきた知見を検討する。他方、規範研究の流れからも常識研究の意義を探る。つづいて、常識の規範的側面の探求方法について一例を示し、実証研究の可能性を考える。そして今後検討すべき課題の概略を示した後、関連が予測される隣接諸概念を吟味する。最後に、常識の動的特性の研究が日常生活にもたらすであろう貢献を考える。

1. 常識

(1) 本稿で考える常識

Fletcher (1984) は、心理学と常識の関係を考える中で常識の内容を三つに分類した。1) だれもが持っている同一の基本的な前提一式、2) 一組の格言あるいはだれもが同じように信じていること、そして3) だれもが持っている同じ考え方である。「だれもが持っている同じ (shared)」ものやことという特性を重視した分類である。個別の知識や所信 (belief) ではなく、一群のものを

一式として捉える視点も Fletcher (1984) の分類の特徴である。

また Schwieso (1984) は常識に 1) だれもが持っている同じ感覚、2) 支障なく日常生活が営める程度の普通の (ordinary) 知性、3) 良識、そして 4) だれもが持っている同じ意見という四つの側面を想定した。Fletcher (1984) の分類とは「だれもが持っている同じ」ものやことという点では同じだが、「よい」ことや感性的側面まで含める点異なる。本稿ではまず、この二つの研究が示す内容の和集合を常識と考える。

次に常識の特性についてまず注目するのは、無自覚という点である。常識はふだんほとんど自覚されることのないまま、我々の思考や行動に影響を及ぼしている (e.g., Garfinkel, 1963)。したがって改めて問われても、我々はとっさにそれを表現できないことが多い。また自覚を促されても、他の常識の存在や論理的、機能的に可能な他の選択肢を考えることは難しい。さらに Duval & Wicklund (1972) が注意を媒介として例証したように、無自覚なときはなめらかにできていた行為が、自覚したとたんぎくしゃくする。無自覚なことが滑らかな行為を可能にする。

さらに、常識が描く「ふつう」は様々な人格特徴とは無関係に存在し、変化する。Garfinkel (1963) によれば、身の回りの社会に対する個人の関わり方は、1) 社会生活における当たり前のこととして理解され合意されているものの中に見ることができ、2) その内容は他のメンバーがみな知っており当たり前と思っているものとして、3) メンバー一般の視点から描かれる。その社会にどの程度溶け込んでいるかは、その社会の「当たり前」を自

1) 本稿の作成に際しては、主査サトウタツヤ先生 (立命館大学) ならびに匿名の審査者お二人から有益なアドバイスを多々頂戴した。終始変わらぬ建設的な姿勢に深く感謝します。

2) 本稿に関する資料請求先は次のとおり。
e-mail: ishii-t@soc.shimane-u.ac.jp
URL: http://sula0015.soc.shimane-u.ac.jp/ishii/

2. 知識としての常識の研究

(1) 従来の研究の概要

常識に上記2側面を認める視点から従来の研究を振り返るならば、知識としての常識の研究の多いことがわかる。そこでは常識の存在を肯定する場合はもちろん、否定する場合でも常識の重要性をある程度認めた上で議論が展開されてきた。

常識はまず、人が現実を認識する際に重要な役割を果たすことが指摘されている。Cory (1934, 1937) や Ramsperger (1938) は認識論の視点から現実認識の基礎に常識をすえた。

また常識的知識に関わる多くの研究や著作は、未だ常識にはなっていない知識を常識とすることを提唱する。なかでも数が多いのは、一部の専門家の知識を広く一般の常識とすべく書かれた研究や著作である (Abraham, 1958; Bross, 1955; Chappell, 1938; Dodd, 1933; Parker, 1973; Reilly, 1935; Simplicio, 1999; Stevens, 1953; Walls, 1952; Wile, 1935)。この中には Spock (1946) のように、いわゆる育児の啓蒙書として世界に広く知られるものも出た。逆に一般の常識的知識を特定の専門分野の常識にしようという提案には、当該分野の従来の方法などに対する不満や批判、変革への希望が見て取れる (Parker & Lacour, 1997; Want, 1983)。一方の専門分野の常識を別の分野の常識にしようという提案も同じ文脈で捉えられよう (Pillay, 1952)。

また逆に、すでに常識になっているかもしれないという危惧のもとに、特定の知識や考え方が常識となるのを阻止しようという主張もある。家庭内暴力の阻止を訴える Kromsky & Cutler (1989) や Sonkin (1986) の研究はその代表例であろう。これらの研究は、一方で、場合によっては非常識と呼ばれるかもしれない知識の導入あるいは削除による変革を意図し、他方、導入される側あるいは削除される側の常識の功罪を問うている。

さらに、より直接的に常識の功罪を考察する研究も多く、よきにつけ悪しきにつけ常識が一つの基準として関心を集めてきたことがうかがえる。そこではまず、感覚や思考が人体とは独立して存在する、という哲学的な立場に対して「常識に還れ」と反論する Isaacs (1950) や Ritter (1944) をはじめとして常識の効用を主張する研究が多い。精神や肉体の障害の予防と治療に常識が役立つとする研究 (Bacon, 1987; Colby, Gould, Aronson, & Colby, 1991; Diefenbach & Leventhal, 1996; Errera, 1968; Laor, 1984; Leventhal, Diefenbach, & Leventhal, 1992; Martin, Gordon, & Lounsbury, 1998; Pillay, 1950; Routh, 1964) や教育場面での有効性を唱える研究 (Brook, 1982; Sternberg, Wagner, Williams, & Horvath, 1997)、人工知能への常識の導入

(Lenat, Prakash, & Shepherd, 1986) や福祉行政への導入を主張する研究 (Melton, 1997) もある。

常識の功を主張する研究がある一方で、常識の罪を唱える研究もある。そこでは教育現場に関する主張 (Becher, 1949; Clifford, 1976; Wistedt, 1994) であれ、医療に関わる主張 (Carpenter, 1991; Gillick, 1985) であれ、例えば Bridgman (1955) や Deutsch (1959) が言うように古くからの直感や経験、判断の限界を科学的知識や方法によって補おうという科学への期待が強い。

同様の議論は科学的心理学と常識をめぐるでも展開されてきた。もとより現代の心理学は科学的であることを旨としているが、特に常識との対比においてこの面が強く意識されるようである。確かに常識は心理学そのものではない (Derksen, 1997) し、常識的直感とは異なる心理学の予測が存在する (Osberg, 1993) としても、常識的展開は科学的心理学の理論ではない (Hoffart, 1983) という主張や常識心理学は非科学的 (Widlocher, 1988) という主張には、研究対象としての常識と常識に則った方法という二つの側面から一考する余地がある。

ただしその前に見ておくべきは、常識の功罪を問うとき善悪や優劣の価値観が入り込む研究が多い中で、価値中立的な研究も存在することである。例えば Hall & Noguchi (1995) は、善悪の価値について中立的な視点から日本人の謙遜を対人関係における一種の儀式として描き出した。Hall & Noguchi (1995) が目指すのは、常識の文化間比較による人間理解である。常識の研究として見るとき、Hall & Noguchi (1995) は、常識が日常的なコミュニケーションに影響を及ぼす様態の研究として位置づけることができる。同様の視点は、感情に関わる常識的知識がコミュニケーションに果たす役割を考察した Toda & Higuchi (1994) にも見られる。また「常識」の項で引用した Garfinkel (1963) も以降の研究とは異なり同じ流れに含めて考えることができる。これらの研究は、他の研究と同じく、常識変容のしくみの解明を経て弊害の解消に貢献することが期待できる。

このように常識に対する従来の研究は、収束すべき何らかの方向を指し示す様子はなく、むしろ研究対象となった常識の数に応じて拡散しているように見える。その主な理由は、多くの研究の関心が個々の常識の内容や特性といった個性に向けられ、共通特性にはあまり向けられてこなかったことにある。常識の共通特性を体系的に研究しようとしてもどう捉えればよいのか、そもそも研究の対象たりうるのか、といった疑問あるいは意見もあったと思われる。

(2) 従来の常識研究からうかがえる問題点: 研究対象としてのふさわしさ

心理学の研究対象として見るとき、本稿では、常識は対象としてふさわしいと考える。まず Furnham (1994)

石井：常識の規範的影響について

が言うように、確かに日常の生活において人々が現実を捉える方法や考え方は、検証方法も含めて研究者のそれとは異なる。だからこそ常識の研究は日常生活における人々の理屈の研究となる。日常生活で我々はその理屈に従って行動を説明し、予測し、統制している。

同様の視点は Kelley (1992) にもより明確な形で示されている。すなわち Kelley (1992) は、Heider (1958) の素人心理学 (naive psychology) を常識を研究する心理学と位置づけた。また Burton (1986) はすでにコンピュータ・モデルを用いたシミュレーションの結果から、同じく、Heider (1958) の分析は常識の先験的な説明であることと、いくつかの帰属理論が Heider の分析から論理的に導かれることを示唆した。これらの指摘に従えば素人心理学に端を発する多くの領域と研究はすべて何らかの形で常識を研究してきたことになる。その中には Asch (1951) の同調実験や Latané & Darley (1970) の援助行動の実験、Milgram (1974) の権威への服従の実験のように、常識的な予測と異なる結果も示された。しかし予測と異なる場合であっても、各々の領域で明らかにされた研究結果が、我々の常識、すなわちだれもが持っている諸前提であり、だれもが行っている推論過程であること、そしてその研究であることは、科学としての心理学の論理性と実証性、結果の再現可能性の高さが、基準に達しない研究を淘汰することによって保証してきた。

ただしこの間、作業の中心は、個々の常識的前提や常識的推論過程の詳細な描出が主であった。常識の研究とは明示しないこれらの研究には例えば膨大な数の態度研究や帰属の研究も含まれる。他方、常識の研究と銘打った研究は少ないが、先にも紹介したとおり、ほとんどが特定の常識の内容を描写することに焦点をあててきた。例えば常識研究の集大成の一つである Siegfried (1994) に収録された 16 編の論文も例外ではない。この中で Rippere (1994) は常識を探るための一つの手法を提案しているが、考察の焦点はやはり常識の内容の描写にあるように見える。また同じく Wagenaar (1994) は課題解決場面でどれだけ多くの解決策を思い付けるかを課題とし、回答項目の度数を指標に常識の拘束力を考えようとした。課題を問題解決に設定したことで思考の柔軟性の研究のようにも見えるものの、常識の構造や力学的特性がうかがえそうな手法である。しかし、Siegfried (1994) において具体的なデータ採取法まで提案する研究は 16 編中この 2 編のみであった。

常識研究のこのような状況は、一方で態度や対人魅力などがその分布も含めて詳細に研究されていることと対照的である。これらに比べて環境の影響が少ないとされる人格や性格についても、その構造や特性はいくつもの角度から検討されてきた。いずれも常識と同じくだれも

が日常的に携え、則っているとされる属性であり研究対象である。

常識研究も従来の諸研究の成果をもとにその構造や力学的特性などを探索すべきときであろう。なかでも常識の規範的側面の研究は、特に今日、切実な研究課題と考える。

3. さらなる常識研究の必要性；従来の研究図式とその限界

この項ではまず、常識についてこれまで構造や力学的特性が実証的に探求されてこなかった事情を考える。そこには従来の多くの研究に含まれる思考図式とその限界が見えよう。

(1) 常識研究不在の現状に至る事情と従来の研究図式

常識研究不在の現状を招いた理由としてはまず、特に第二次世界大戦後の社会心理学をアメリカが主導してきたことが挙げられる。そこでは態度や魅力、そして人格や性格の研究が盛んに行われてきた。それは、歴史的にきわめて短い時間に多くの異文化が混在することになったアメリカという世界での切実な共通項探しだった。このときその共通項はどの文化から見ても客観的な言語と方法で語られなければならない。その具体的な現れが統計的手法であり、論理の駆使であった。また理解しようとする対象も、文化という衣服をまとっていない状態の人であり、多くの研究が人の理性的あるいは機械的な側面を強調することになったのも必然的な成り行きの一つだったと言えよう。

すなわち、人はなぜカメラのように、あるいはコンピュータのように事物を認知しないのか、あるいはできないのか、という問い方である。ちなみにこのときカメラやコンピュータなどの機械に具現化されているのは、いわゆる西洋文明における思考の伝統に基づいた論理であることも見ておきたい。人と機械、人と論理を比較するような視点は、例えば錯視現象において、物理的あるいは論理的事実と人が認知した像との食い違いを指標として、人の人たる所以を数多く明らかにした。このとき観察の焦点となったのは、当該研究が採り上げた要因の影響を受けているはずの「見え」と、「本来」の像との差だった。

他方、態度や対人魅力、印象形成などについての研究は、帰属の研究も含めて社会的認知と総称されるように、社会的要因が関わる認知特性を扱ってきた。しかし理性的あるいは機械的な土台を強調する先の視点は、社会的要因が関わる認知特性を考える際の視点としては必ずしも十全なものとは思えない。

認知心理学と同じく、社会的認知においても「本来」との差を重視するのは、一つには、効率的な研究の進展という目的があった。ただしその場合でも、研究者が厳

密に「本来」を呈示しえたのはわずかだったと思われる。ほとんどは背景に「ふつう」を従えた「本来」であり、そこで比較したのは「ふつう」を背景とした「本来」と「見え」であった。このとき「ふつう」が「本来」と「見え」にいつも同じように影響していたという保証はない。

例えば有名な Asch, S. の同調実験 (e.g., Asch, 1951) においても、被験者は標準刺激と比較刺激のほかに、実験者の姿や声を見聞きすることができた。実験室で目の前に示された図形は、「自分たちの社会でふつうに見かける、とりあえず信頼できる人」が持ち出してきたものだった。つまり、まず「本来」を呈示するときすでに「ふつう」でくるんでしまっていた。他方「見え」に対する反応は、明らかに、他の「参加者」たちが構成する「ふつう」の影響を受けていた。このとき、他の「参加者」たちも「ふつう」の人を装っていたことに留意したい。それがどちらであれ、一方の「ふつう」に組みすれば、もう片方が「異(=非常識)」となる状況設定であった。

また例えば印象形成の実験においても、被験者にとって刺激人物が「刺激文(画)に描写されただけの人」という状況は存在しなかったと考える。刺激人物が未知の人であっても、それが人である限り、我々はまずそこに人の諸属性を見てしまう。さらにそれはだれか特別な人の諸属性ではなく、ありふれた「ふつう」の人の諸属性である。特別の示唆がない限り、例えば自分と同じ肌の色、同じ性別、同じような年齢や境遇の人を見る人は多いと思われる。

他方これらのことは、研究者の側も意図的に、あるいは知らず知らずのうちに按配してきた。研究者は被験者の社会性を考慮して、用いる諸属性や背景を選んできた。仮に Asch の同調実験において、例えば単純な追試で標準刺激と比較刺激はそのまま借りえたとしても、その他の状況は被験者がおかれた社会や文化の中で「ふつう」とされるものに調整する必要があった。

どの場合も、被験者が幾重にも見る「ふつう」の内容は、自身や実験者(研究者)の属する文化や社会の中で「ふつう」とされるものであった。それを見てしまうのも被験者自身に文化や社会がしみついているからである。そしてその程度や内容、さらには影響を調べることが、そもそも社会的認知研究の目的(の一つ)だった。多くの研究者が「ふつう」の中で「ふつう」を使って、その「ふつう」に影響された被験者の「ふつう」を調べてきた。このことは、実験的手法に必然的に含まれる非日常性の中での検証という事態を考え合わせるならば、避けえない成り行きではあった。しかしその自覚のないまま幾重にも重ねられた「ふつう」は、探るべき対象をいっそう見えにくくする。

(2) 従来の研究図式の限界

人と機械、あるいは人と論理を比較する視点は、機械や論理が優れた物差しであるという意味において魅力的である。しかし特に社会的認知においてはやはり幻想でしかないと思われる。そこで本来調べられているはずなのは、A という条件下での非機械的(非論理的)な見え方と、A と比較しうる B という条件下でのやはり非機械的(非論理的)な見え方の違いである。この意味において、基準とするのは物理的事実であっても論理的事実であっても、あるいは的確に記述でき再現できるならば伝統的(経験的)事実でもよいことになる。同時に社会的認知においてはどの場合も、どこまでがそれぞれの事実でどこからが非物理的、非論理的、非伝統的(非経験的)な見えの部分かを厳密に特定することは困難と思われる。

このような困難さが従来あまり表立ってこなかったのは、社会的認知研究にも「世界中どこでも、そしていつでも、人であれば皆同じ」、さらには「理性的かつ論理的」という前提があったためと思われる。しかしこの前提は、社会や歴史、そして文化といったレベルで人を考えるとき明らかに成り立たない。前提に含まれる理性や論理も、いわゆる西洋文明における思考の産物であった。従来の実績が示すとおりこの前提が高い普遍性を持つとはいえず、現実的にはやはり限界の存在を想定せざるを得ない。

柿崎(1974)は、すでに四半世紀以上前、先行研究の追試結果が多義的であったことに基づき、知覚判断の過程を感性的所与とそれを分類し範疇化する機能とに分け、後者を重視する考え方を示した。柿崎(1974)によれば後者の機能は判断者の過去の全生活史を担っている。日常的にはとても機械的に見える知覚判断の過程にまでこのような機能を重視する指摘は、異文化接触の多様化と機会増加を考えたときいっそう重要性を増す。社会心理学においても、今一度、社会を問い直す時期である。昨今の、文化を考える心理学(e.g., 北山, 1997)の台頭は、このような視点から先の前提を問い直す画期的な試みの一つと言いうる。さらに常識は、文化のようなマクロなレベルではなくもっとミクロなレベルで、社会的集合状況にいる人の認知や行動を統制するものとして位置づけられる。そこでは「ふつう」の状況でなぜそのような諸属性を見てしまうのか、そしてなぜそのように見てしまうのか、が研究の焦点となろう。統制を受ける個人の視点からはまず学習の内容を明らかにした上で、常識の圧力や強さ、方向、タイミングなどの学習の仕組みを考える研究になると思われる。常識にはものの見方や感じ方、つまり社会的な認知の法則も含まれることから、その研究は認知法則の法則、すなわちメタ認知を考える研究としても位置づけられる。

石井：常識の規範的影響について

ぼす。このことについて Garfinkel (1963) には直接の言及はない。しかし、Garfinkel, H. 自身も含めて、その後エスノメソドロジーの流れをつくった研究者たちは明らかにこの認識に立って常識（の弊害）を批判している。

(4) 常識の規範的側面の研究としての Garfinkel (1963)

本稿の視点から見直すとき、Garfinkel (1963) は、権威などの明確な裏づけを特に持たない規範が、それでもなお規範としての拘束力を持つ機構を、「ふつつ」への信頼を媒介として解明したものと読むことができる。このとき「ふつつ」への信頼には先に述べた構成期待、すなわち「ふつつ」を重視する態度や価値観が当然の前提として含まれる。「ふつつ」は、権威やリーダーシップと並んで、同調あるいは服従を求める圧力の源泉になる。

「ふつつ」が圧力を発揮する仕組みは、常識が「ふつつ」を描く描き方に見ることができる。Garfinkel (1963) がまずゲームの基本ルールをもとに 11 項にわたって検討し、現実の世界との異同を吟味した後、提出した描き方の概略を次に示す。

まず常識が描く事象とは、日常生活の中で起こりうることを分類し、各分類項目の本質を表す事象で代表させたものである。それぞれの分類項目は、その中に含まれる事象の関連を示すルール、分類項目同士の関連を示すルールとともにさらに大きな分類項目を形成する。また事象はそれ自身のうちに関連性についてのルールを含んでおり、それによって実際に観察した個々の結果の本質的特徴を理解できるようになっている。例えば「こんにちは」と「こんばんは」の間に位置するという関係を含んでいる。また、分類の仕方や関連のつけ方には意図が含まれている。これによって観察されるすべてのことが統一性を持った一つの世界の中のできごととなり、ある事象の中の特定の事例として解釈できるようになる。

常識が描く事象の内容は、上述のごとく、分類された結果であるため、時々刻々変わりゆく実際の局面に対して不変のままであり、したがって、標準として使うことができる。これによって正しい行為、あるいはその場にはふさわしくない動きを識別することができる。

つまり、常識は正誤、善悪を決める。「よい子であれ」、「よき人であれ」、という期待はどの文化、どの歴史にも存在する構成期待の表明である。しかもこのとき、よいこととは格別の善行を指すわけではない。「ふつつであれ」という期待である。「ふつつ」の「よき人」に満ちた環境が「ふつつ」の環境であり、この中でこそ、人は安心してふつつにふるまうことができる。

さらにこのとき「自分とはもかく」という視点が圧力の発揮を助長する。常識は一方で構成期待に基づく合意

という私的な一面を持つと同時に、もう一方で「このような場面ではふつつこうする（ある）ものだ、みんなこうする（ある）ものだ」という標準としての公的な一面を持っている。この公的な面は、「当人の意見や好み、思惑はともかくとして」という形で個人の関与を拒むことがある。

常識への圧力をかける側が「私の意見はともかく」と言うとき、この特性は自我関与度の低下として理解することができる。Zimbardo (1980) によれば、何らかの理由によって自我関与度が低下するとき、我々は言動の自制ができなくなる。援助行動における傍観者効果を「責任の分散」という考え方で説明する Latané & Darley (1970) や「生徒」との距離が遠くなるほど権威への服従が促進され、罰がエスカレートすることを示した Milgram (1974)、あるいは匿名性が高くなるほど攻撃行動が促進されることを示した当の Zimbardo (1969) などがその例となろう。

また「自分とはもかく」という視点に決まって伴う「みんな」という常識本来の特性も圧力の源となる。「みんな」という不特定多数は、多数であることとともに、一種の普遍性を表している。「○○の常識」と特定できる常識ならば、当の○○の欠点や不足を指摘して否定することもたやすい。しかし普遍性が高い場合には、たとえ欠点や不足があったとしても、それを否定することはめぐりめぐって自己の否定にもつながりかねない。したがって否定することが相対的に困難となる。

しかし一方圧力を被る側に立てば、「自分とはもかく」という視点は、一つには文字どおりの意味において、もう一つには圧力をかけてくる相手に対する反論の言葉として、圧力をかわすための武器となる。「常識なんて私には関係ないもの」というのは前者の例である。後者は、「みんなそうしている」とか「そうするものだ」という圧力に対して「そういうあなたはどうかの？」という形で使われる。

例えば流行の研究 (e.g., 佐野山, 2000) に示されるように、我々には現在の「ふつつ」を重視し維持する気持ち（構成期待）だけではなく、それを破りたい気持ちもある。その代表はまず好奇心であるが、常識の圧力に対する反作用としても理解できる。先の反論が功を奏する場合には、常識を変える糸口ともなろう。

このように常識はそれ自身の中に、同調や服従への圧力を発揮する仕組みと発揮させやすい特性、さらにはかけられた圧力をかわすための仕掛けまでも持っている。これらはどれも、Garfinkel (1963) の考察とその延長上に導かれる命題である。この意味において Garfinkel (1963) はやはり常識の規範的側面を研究する出発点としてふさわしいと考える。

5. 規範研究における常識研究の意義

常識を規範という視点から考えるとき、従来の規範研究に先例を求めるのは当然の行為である。しかし期待にかなう先例はなかった。この項ではその理由を考えながら、規範研究における常識研究の意義を探る。

常識の規範的側面については、まず社会学ではエスノメソロジーが探求を担い、多くの警告を発してきた。また文化人類学をはじめとする「文化」を研究する領域では、文字どおりそれぞれの文化の常識が研究されてきた。しかし常識の規範的側面の、いわば動的特性の抽出は、その任にふさわしいと思われる社会心理学においてもほとんど行われてこなかった。

その理由は何よりもまず、常識が規範らしい規範とは見えない点にある。木下・林(1991)は社会的ルールの構造を考える中で、規範らしい規範の条件として次の五つの項目を挙げる。すなわち、1) ルールは命題である、2) ルールには真理値がない、3) ルールは指示的である、4) ルールは破りうる、5) ルールは変えうる、である。常識はこの五つを満たしているにもかかわらず、そうは見られない。常識は自覚されない場合が多く、明文化されていないものばかりという現状から、まず1)から3)の条件が当てはまらないと見られるのであろう。

次に4)はともかく、5)について、おおかたは常識は自分たちとは無関係に(自然に)変わる、という認識だと思われる。その対極の認識は企業の商品開発とその販売戦略に見ることができる。石井(2001b)は、企業の担当者が会社の存立をかけて消費者の生活を変えようと試みる姿を描いた。この人々は明らかに常識の変化に対する「意図の有効性」を自覚し、日々努力している人々である。しかしその一方で、消費者の生活はなお徐々にしか変わらない。その変化量は我々が受け入れ可能な常識の変化量であり、ごくたまに「ヒット商品」という形で大きな変化が起こるものの、ほとんどはごくわずかな変化である。昨日とは特に変わったところのない今日の積み重ねの中で、例えば、日々の装いは明治以来百年余をかけて和装から洋装に変わった。今日では衣服を着ると言えば洋服を着ることを指す。つまり常識の変化量はわずかであり、認識されにくいことが、規範と見られない二つ目の理由と思われる。

他方、規範の変化については、我々のほとんどが「意図の有効性」を認識している。それは研究者も例外ではなく、例えばリスキー・シフトをめぐる研究では規範の変容は集団意見の変容に置き換えられ、さらに個人の態度(の集合)の変容に置き換えられる。集団規範の研究を通覧するとき、集団意見の変容を検討する研究はたくさんあるが、集団規範の変容そのものを扱った研究はほとんどない。

これと対極にある視点、つまり規範自体が自律的に、生まれ、変わり、消える、という視点は、例えば集団規範が特定の点に収束してゆく過程を検討した Sherif (1935) 以外には見られなかった。さらに実質はともかく、少なくとも見かけにおいて、人や神(あるいはお上)と無関係に推移するという視点は、従来の規範研究にはなかったように見える。これは一方で、例えば世論の形成過程が「沈黙の螺旋」理論(Noelle-Neumann, 1980)の名のもとに精緻な考察を受けていることは対照的である。

では、少なくとも見かけが、規範らしくない規範の場合はどうであろうか。これに関する研究が見あたらない。規範の研究に際して規範らしい規範から始めるのは当然だとしても、続けて善悪、良否、あるいは適否が必ずしも明確ではない規範、特定の意図を感じさせない規範も検討すべきであろう。

規範らしくない規範の特徴とは、まず常識の特徴である。しかし同じ特徴は、他にも習慣や習俗、そして文化にも見出すことができる。なかでも文化については、特に昨今、文化心理学の名のもとに多くの興味深い現象が精力的に研究されてきた(e.g., 北山, 1997)。また、規範とは見えないまま影響力を及ぼす常識とは逆に、規範らしくない規範が標準になり、明らかな規範となるプロセスの研究は、例えば、マイノリティ・インフルエンスの研究に見出すことができる(Moscovici, 1981; Moscovici & Faucheux, 1972)。

規範研究としての常識の研究は、まず身近な規範の研究となろう。日常の身近な規範は程度原理で機能するものが多い。その研究は、規範の強制力の程度、あるいは強制力が及ぶ範囲という視点からの、規範の変容過程の解明として位置づけられよう。

規範研究としての常識の研究は、また、「規範は変わる」と考える視点からの研究となる。規範自体が自律的に生まれ、変わり、消える、という視点は、確かに従来の考え方に反する。しかし例えば、集団力学が集団にそれ自身の力学を想定したように、研究の視点としてあってならないものではない。むしろ集団行動の研究と集合行動の研究の接点として期待される。

6. 常識の規範的側面の研究; その具体例

(1) 問題意識の三つの源流

次に本稿で考える常識の研究について、問題意識の源を従来の三つの研究の流れに求める。まず第一は、常識的推論過程の研究として位置づけることのできる社会的認知の流れである。次に異端との遭遇を研究の焦点とする流行、普及過程、社会的表象の三つの分野における研究の流れ、そして第三にエスノメソロジーの本流にありながら本稿の視点への分岐点である Garfinkel (1963)

石井: 常識の規範的影響について

既知の世界の諸前提への固執がうかがえる。

従前の世界の諸前提に慣れ親しみ、周界がいったん変化した後には変化前の世界に固執する姿とは逆に、例えば「流行」の研究が多く描き出すのは、マンネリを厭い、変化を望み、変化に機敏に応じる姿である。ルーズ・フィット・ソックスを例に佐野山(2000)が描く流行過程の中でも、「その他大勢」が追随する直前までの部分は自己顕示、自己主張、自己確認といった「目立つ」あるいは「目立ちたい」動機が中心に据えられている。

自身や周界の安定を望む気持ちと変化を望む気持ちという、少なくとも見かけは相反する二つの動機を分けるのは何であろうか。常識の研究は、従来の流行の研究とは向かい合う視点からこの問題を眺めることによって、解明に貢献できると考える。

また、我々が周界の変化に応じてゆく過程は、従来、例えば順応というタイトルのもとに神経生理学的なレベルから、また適応については不適応を考えるという視点で、心理学や教育学などにおいて多くの研究が行われてきた。常識の研究は、日常的な社会生活のレベルにおいて、適応を問い直す視点からこれらの研究を補完すると思われる。

そのために少なくともこれからの常識研究は、一つの方向として、特定の事象についてその常識を描き出すのではなく、常識と非常識との境界を見定めた上で、その動態を探る研究となろう。当該研究の対象は特定の事象であってもその背景には常識の全体的特性を見しておく必要がある。対象となる事象も特異性の高い話題ではなく、日常的でごくありふれた事象が候補となる。求めるのは「特異性」の構造ではなく、「ふつう」の構造である。

(c) **提案3: 「変」という感覚** 石井(2001a)はさらに、常識をとりまく微妙な事象を切りわけの道具として「変(anomalous³⁾の程度」という指標を提案した。すなわち、常識的な世界を維持しようとする我々の姿は「変」という感覚によって自覚することができる。非常識と出会ったとき我々はまず驚く。しかる後、好奇心をもって接近するか、不安によって回避するか、自分が動くか相手を動かすかなどの選択を行う。どの場合も発端は驚きであり、「変」という違和感である。よきにつけ悪しきにつけ、明らかな非常識でなくとも、ふつうではない、すなわち「変」と感じられたものはその瞬間に我々の目をひく。そしてこの感覚はだれもが同じように持っている(common)ものだからこそ、コミュニケーションや社会がうまく機能する。Garfinkel(1963)が描いた例においても、自宅で下宿人のようにふるまった学生は、何か悪いこと、あるいは望ましくないことをした

わけではない。むしろふだん以上に紳士的に礼儀正しく、望ましくふるまった。家族の驚きは「なぜそんなふうに、他人行儀にふるまい続けるのか」、「なぜそんな変なことを続けるのか」という点にかかっていた。

「変の程度」という指標の導入は、再び、常識あるいは非常識そのものの内容ではなく、その関係に注目することを意味する。すなわち何を常識とし何を非常識とするかは、古今東西において様々と思われる。しかし、事象のある様態を常識のうちと判断するか、非常識(常識外れ)と判断するか、という常識の感覚はどの時代、どの地域においても普遍的に存在したはずである。Schwieso(1984)の指摘のとおり、常識はどんな事象についても、そのあるべきふつうの様態とそうでない変な様態とを見分ける感覚という一面を持っている。この感覚はSchutzやGarfinkelの言うとおり間主観的であり、個人の視点からは五感に次ぐ第6番目の(社会的な)感覚と見ることもできる。

またこの指標の導入は、「変」の側から常識の輪郭を描こうとする試みである。「ふつう」の側から常識を探ろうとするRippere(1994)やWagenaar(1994)、さらにはGarfinkel(1963)とは、「変」と「ふつう」の両方を視野に入れている点では同じだが、アプローチは逆であり、互いに補完することが期待される。

(d) **提案の具体的展開** これら三つの提案を石井(2001a)は次のように具体化した。ここではキス、食事、おしゃべり、携帯電話の四つの事象についてそれぞれの常識を混ぜ合わせ15の状況(表1参照)を設定した(提案1)。この四つの事象についてそれぞれ15の状況における変の程度を問うた結果(提案3)から、キスと食事について常識と非常識の境界を見出した(提案2)。全部で4回にわたる調査結果のうち、図1に示すのは、第4回調査の食事の結果を階層クラスター分析にかけ、デンドログラムに表したものである。項目4(戸外で歩きながら食事)と項目1(部屋の中で歩きながら食事)の間に境界を見ることができる。類似性の高さに応じて小さなクラスターがしだいに集まり、最終的に大きな二つのクラスターになるという双核型のパターンは、食事について4回の調査を通じて変わらなかった。また項目4(戸外で歩きながら食事)と項目7(ものかげで食事)は調査によって常識クラスターと非常識クラスターの間を行ったり来たりした。境界付近ではその内容に柔軟性のあることがうかがえる。さらに非常識に対する感覚が鈍くなっている状況(第1回調査)でも境界は見出された。

このような双核型のパターンは、食事についてのみならず、キスについても得られたことから、特定の事象の常識を描き出すのではなく、当初の目的どおり、常識の一般的特性を描き出せたと考える。常識はやはりカテゴ

3) 石井(2001a)では「変」をstrangeとしていたが、本稿ではこれをより中立的なanomalousと改めた。

間の性質や起伏は、物理空間のように固定的、絶対的なものである場合は少なく、パーソナルスペースの研究が示すように、当該空間に含まれる諸要素によって流動的、相対的に変化する。

また我々は、自覚しているかどうかはともかく、地位ディスプレイやなわばり行動、姿勢反響 (Morris, 1977) などの合図や信号によって、自らのいる空間の性質を周囲に対して常に示している。合図や信号の意味は言葉と同じく社会的な合意に基づいており、具体的な含意が詳細に記されているのが常識ということになる。

すなわち常識が作る空間は社会的であると同時に情報によって構成される情報空間である。タブーを犯したときに我々が謝罪する「そんなことは存じませんでしたので」という言葉に、はからずもその証を見ることができる。

他方その中で動きまわる人は「自律」と「開放」という矛盾をはらんだ存在である。つまり、常識の個々の内容には幅がある。常識に則って行動する場合でも、採るべき様態には選択の余地がかなり広く残されている。その中から我々は採るべき行動を自らの意志で選択する。常識外れを厭わなければ選択肢はさらに増える。重要なのは、我々は常識の定める起伏にただ受動的に従っているのではなく、大なり小なり自らの意志でその時々々の進路を選んでいる点である。

そしてこの自律系が暴走することなく周界との調和を図るためのもう一つの要素が、人の開放系としての側面である。まず我々は生物として自己完結的な閉鎖系ではいけない。空気や飲食物など、たえず外部からのエネルギー補給を必要とし、取り込んだエネルギーを活動や老廃物の形で外部に発散、排出する開放系である。この間エネルギーの流れはどの段階においても滞ることを許されない。不断に一定の流れを保っていなければ、たちまち系の安定が乱れる。この安定は静止状況下の安定ではなく、流れの中の安定であり、動的平衡と表現できる。空腹になれば食べるというように、この平衡の維持は我々の動機の一つである。

木下 (1981) は流言発生機構を探る中で、人が情報についても動的平衡に動機づけられた開放系であることを指摘する。そしてこの指摘は流言事態だけではなく情報一般についてもあてはまる (石井, 1997)。すなわち我々は不断に情報を代謝しながら情報的動的平衡の維持に努めている。

自らの行動について、周界からの情報に依存せざるをえない一面と意志に基づく自律という一面とは概念的には互いに矛盾するが、我々はこの両面についても平衡を保っている。方法の決め手は例えば時間差の活用が想定されるが、具体的な詳細は、平衡を保てない状態である「無気力」や「暴走」への対処例に見るとおり、現時点

では個人的あるいは職業的な「生活の知恵」や「大人のずるさ」と言われるものの中に収められていると思われる。体系的な記述や実証的な探索が今後の課題となる。

(b) 心理的慣性の法則 常識や情報との関わりから見えてくる「自律」と「開放」という人の 2 側面は、変化に際して人の対応が鈍くなることを、あるいは遅れることを予測する。対応を遅くする要因は、まず我が身を通過する情報の量と、内容のモニターに要する時間、さらに注意である。特に注意に関しては Duval & Wicklund (1972) が指摘するように、我々は任意の時点において 1 カ所にしか注意の焦点を置くことができない。見聞きしたばかりの光景や話に気をとられている間、我々の耳目は周囲を見聞きしていない。推理小説の作家や奇術師がミスディレクションという呼び名でよく利用する (松田, 1988) ように、この間の環境の変化に我々は気づかない。そもそも変化が予感されるときや突然変化を突きつけられたときは、いつもより多くなっている情報の、いつもより詳細なモニターにふだん以上に時間と注意が要求されるときであり、したがって周界の状況把握がただでさえ困難で、適切な対応が遅れがちなきななのである。

その上、生じた変化に受動的に従う場合はまだしも、そこへ「適切な処置」などの意図を実現しようとする場合には、なおのこと対応が遅れざるをえない。完璧に遂行しようと思うほど我々はその準備や練習に追われ、いざというときには疲れ果てることが多い。どんなときでもふだんと同じ調子で力むことなくやっつけるのが名人上手なのであろう。つまりその他大勢の凡人は変化に際して、それが重要であればあるほど、自ら望む対応が遅れることになる。遅れている間は、自棄にならなければ、たとえ不適切であろうと従前の常識的な行動パターンを自動的に繰り返すことになる。つまり物理的な慣性と同じく、周界に変化があったとき心理的な慣性も顕著に観察される。心理学においてもこれまで、実験研究の多くがこの心理的な慣性の存在を暗黙の前提として周界の変化を起こしてきたように見える。

また、変化は周界に起こるだけではなく我々自身にも起こる。自らの変化を周囲に訴えるとき、周界の対応が鈍いこと、つまり周界にも慣性があることは立場を変えてみれば容易に理解できる。周界を行き来しているのは常識人であり、街並みは細部に至るまで作者たちの常識が具現化された人工物である。Garfinkel (1963) の学生の報告にも明らかなように、常識的な周界はその中で起こる常識破りを阻止する方向にはたらく。そうしなければその場はきわめて不安定になってしまう。年齢や収入、その他の要因において様々な人を抱えるコミュニティほど不安定が要求する安定化への労力は大きな負担になるであろう。

石井：常識の規範的影響について

がわからない。Garfinkel (1963) が看破したように、常識はその外部にいるものからは知るのがもっとも難しい。そして異端者に対してどのようなことが行われるかは、歴史や我々の日常に豊富な事例がある。特に衆目の集まる場所で我々が作法にこだわる背景には、一つには、自分が異端者になりたくないという動機を見ることができ

る。逆に考えれば、我々が日々試みる変化は異端者にならない程度の変化、異端者すれすれの変化とも言う。背景に異端者ではないという安定した評価があるからこそできる試みである。最初から異端を承知で変化する事例は、成功例はまれであり大きく喧伝されるものの、そのかげに表立っては報告されない数多くの失敗例があることを忘れてはならない。自らの安定した評価をなげうって賭ける大きな変化ではなく、日常的にだれもが行うささやかな変化は、常識人という安定した評価の上で異端すれすれのスリルを味わう遊び心の発露と見することもできよう。ただしそのささやかな変化も数によっては大きなうねりになることがある。

(b) 異が異端になる量 社会現象を考えるとときその量は重要な規定因である。すなわち周界の異は十人十色だから容認できる。おなじみの個性でも十人一色ならば目をひく存在となる。多数の常識の中からこぼれる異が異端になる量は、さらに増えて再び常識になる量とともに、流行、普及、常識化の過程をつなぐ接点でもある。

そしてこの量は必ずしも実際の量である必要はない。実際には少数かもしれない現象を例えばマスメディアがカメラのフレームやテレビ画面で切り取ったとき、拡大レンズをのぞくように、見る側は多くに見てしまうことがある。このような量の虚像は変化を促すもう一つの変化エージェントである。

常識だけではなく流行や普及過程全般のしくみを考えるとき、このようなマスメディアの手法や虚像とそれに対する人々の反応はきわめて今日的な課題となる。ステレオタイプや共同幻想を簡単に作りうるからである。異文化あるいは異なるサブカルチャーに対して、あるいは不登校や老人、若者や流行、さらには大人と子供等々の身近な話題にまで、実際の大勢と異なる像（虚像）をいだいている例は、いだかれている例も含めて、よく見れば思っている以上に多いと思われる。

さらに大勢と異なる虚像は、異端すなわち非常識についてだけではなく、常識についても同様に想定できる。例えば外国の教科書に紹介される我が国の生活ぶりはそのままその国の人々が描く日本のイメージになる。これを逆転すれば、我が国の教科書に紹介される諸外国の姿がそのままその国々に対する我々の常識となっているとしてもおかしくない。この構図は国内に限定しても見出される。石井(1999b, 1999c) はふつうの中学生・高校

生像について、だれもが自分とは似ていないと感じている「ふつう」の中学生・高校生像、つまり共同幻想という虚像のあることを示した。これは「みんなの無知(pluralistic ignorance)」という名のもとに、昨今、当該事象や当該行為に対する動機の誤認に端を発する現象であることが指摘されている(e.g., Miller & Prentice, 1994)。

問題は虚像そのものの是非ではない。よい結果を期待させる虚像ならば実体化させ、悪い結果を懸念させるものならば消すことになる。本稿で重視するのは、虚像全般の是非ではなく、それが成立するしくみである。これがわかって初めて助長することも消し去ることも可能になる。みんなの無知について検討がすでに始まっている虚像成立のしくみについては、常識の規範的側面からの検討も有益と考える。

(4) 常識のいいかげんさ

今後取り組むべき課題として次に挙げるのは常識のいいかげんさである。Garfinkel (1963) も述べているとおり常識の輪郭は特にその境界付近で曖昧であり、「等々(エト・セトラ)」という一項を必ず付けなければならなかった。石井(2001a) では特定の項目が調査のたびに常識と非常識のクラスターを行ったり来たりした。常識が有するこのいいかげんさの一つにはその変化つまり動態を考えるための糸口となる。以下の部分では特に、常識と非常識の境界のすぐ外側、非常識側に注目する。

(a) 常識の概念定義が導くずれと現実とのずれ 常識のいいかげんさはまず常識の概念定義から導かれる。カテゴリーラベルと内容のずれである。Garfinkel (1963) によれば、事象に関する基本ルールの名称とその内容を記述した項目の内容(群)とのずれと言っている。このずれは、「ふつうの条件」(Garfinkel, 1963) にも示されるように、少なくともその一部は建て前と本音という表現で表されるものに相当すると考えられる。さらに日常においては現実とのずれも絶えず生じる。

このようなずれに対して、我々は自覚するとしないとを問わず、常にその大きさをチェックしている。ずれの大きさがある値を超えたとき、我々はずれに気づく。このとき生じる感覚が「変(anomalous)」である。それに伴う感情が肯定的か否定的かによって、つづいて我々は当該事象を受け入れるか拒むかの選択を行う。

つまり変と感じた時点で、その事象は常識の範囲外にあることになる。しかし、非常識として直ちに排除されるほど明確な位置ではなく、受容か拒否かをこれから判断する未決域ともいうべき位置にあると考えられる。そしてさらにこの中に受容域と拒否域があると考えられるのである。

この発想と用語は、人の判断過程に一定の幅を持った領域を想定するためのものであり、社会的判断の法則に対する Sherif & Hovland (1961) の論考にすでに同じ

じたいという欲求の現れと考える Suls & Wan (1987) や「私に限って大丈夫」と思う傾向と考える Park (1998) の知見を考え合わせるならば、当該特性の望ましさだけでなく、自己に対する損得の可能性を含めた自己防衛ならびに自我高揚の動機が存在するものかがある。すなわち自己への不利益を避ける場面では「私だけじゃない」（同意者数の誤認）という認知と「私に限って大丈夫」（独自性の誤認）という認知がともに予測され、利益を求める場面では「みんなしてる」（同意者数の誤認）という認知と「私は特別だ」（独自性の誤認）という認知が、やはり、ともに予測できる。一方で自己防衛的 (Verhac, 1997) であり、他方で自己高揚的である。ともに自己を中心とする視点からの動機であり、同意者数の誤認と独自性の誤認の生起を予測するには、さらなる要因が求められる。周界との関わりは候補の一つとなる。

(b) 周界との関わりにおける動機 石井(1998)は常識の境界を調べる中で、持ち歩くシールの枚数について周界との関わりにおける動機を見出し、同意への期待 (generous consensus) と名づけた。階層クラスター分析による結果は、「自分と同じ人はたくさんいる、自分はふつう」という同意者数の誤認を示しているようにも見えた。しかし「自分と同じ」が「ふつう」であれば、変の程度についても1から3枚の範囲が常識クラスターになったと思われる。また持ち歩いている枚数が「ふつう」の枚数に含まれることから独自性の誤認とも言えない。

さらに、「変じゃない」という評価が他の評価に変わる直前の枚数と、同じく「している」という評価が他の評価に変わる直前の枚数の相関係数は、一方で常識と行動との相互関連を示した。しかしその枚数は同じではなかった。この点において、持ち歩くシールの数に対する変の程度の評定結果は同意者数の誤認とは言えない。

つまり持ち歩くシールに対する結果は、独自性の誤認でも同意者数の誤認でもない、第三の虚像を示している。この虚像は、独自性の誤認とは少なくとも不利益を避ける際の脱自己の視点においては同じだと考えられる。さらに虚像であるにもかかわらず一つの規範として行動に影響を及ぼす点においては、独自性の誤認や同意者数の誤認と同じと考えられる。しかし動機に違いがあった。先の結果には、自分が現在していないこと、あるいは関心が低いことであっても、このくらいはやはりふつうと見てほしい、と周界に寛大さを期待する気持ちを見ることができた。

例えば当該行為の結果が善悪や適否について不確かなとき、否定的な評価に備えて周界の寛大さをあらかじめ期待するのは不自然なことではない。シールの場合、常識からの逸脱に対する布石として見ることもできる。こ

の期待は、同意者数の誤認や独自性の誤認と同様、やはり自己防衛的な傾向を映している。しかし周界に判断をゆだねる視点は同意者数の誤認や独自性の誤認とは異なっている。また周界の寛大さを期待する以上、自派は少数である方がよい。その極端が「自分だけ」であり、そう思えるとき「自分一人くらい」（山岸, 1990）という表現が出る。ここで言う寛大さは、より中立的には曖昧耐性 (占部・林, 2002) と考えることもできよう。

(c) 常識研究における二つの誤認と同意への期待 これまでの同意者数の誤認や独自性の誤認の研究は、誤り (false) の原因究明のために、かえって研究を複雑にしたきらいはないだろうか。すなわちこれらの領域では客観的な数を明確にするため、集団状況における吟味が多くなったと思われる。その結果、集団に関わる要因と虚像 (false) の関係がいつも考察につきまとはいなかっただろうか。これらの現象の興味深さは本来、集団の有無とは無関係だったはずである。

他方、常識も含めて社会的な事象については正確な度数を問えないことのほうが多い。内容についてもまず問えるのはその場における変の程度であり、その後で、論理や規範などによって明示された一部分について正誤 (true or false) が問えるにすぎない。

常識であれ同意者数の誤認であれ、その度数や内容を評価するときにはたらく感覚は共通部分が多いと思われる。ある事象のある様態を変と感じる人が増えれば、それは非常識となる。反対に実行者が増えればそれは新しい常識となり、同調や服従を強いる新たな規範となる。このとき基となる感覚は特に間主観的であり、人が元来持っている五感を社会的に支えるものとして位置づけることができる。そこで問うべきは、調査結果や実験結果の内容の共通性や普遍性、評価された度数の安定性である。視点を逆にすればこれらは内容や度数の変化あるいは変化率を問う視点である。このような視点から同意者数の誤認や独自性の誤認、さらに同意への期待を問うとき、それはもはや常識の規範的側面の動態を問うに等しくなる。

9. 最後 に

以上述べてきたように常識の研究は、特に規範的側面に関する動態については、まだ始まったばかりである。社会的な事象について我々が持っているイメージは我々の情報処理能力から考えて否応なく虚像部分を含むこと、その虚像部分が人の思考や行動に与える規範的影響の動態が研究の中心になることは上に述べたとおりである。常識の側から見ても非常識の側から見ても、検討の中心はまずこの虚像部分が実像になり影響力を獲得してゆく過程となろう。この検討は、逆に実像の部分が虚像になってゆく過程、すなわち規範としての影響力を失って

石井：常識の規範的影響について

ゆく過程の検討でもある。

世の中の変化、特に科学技術の変化は、我々の日常生活において旧来の常識の虚像化を進める。古くなった実像が虚像になる速さと新しい虚像が実像になる速さがうまく釣り合わないところでは常識の齟齬が起こっている。

そのとき現状を把握した上で新しい常識をつくってゆくか、その自覚もなしにお互いに持っている旧来の常識に閉じこもってしまうかは、社会の安定に関わる大きな分かれ道である。我々一人一人の個性をはじめとして日常生活において許されている変（異）の洗い出しと許容範囲の探索による常識の静態の描写、および継続的観察による変化の追跡を多方面にわたって行う必要がある。また例えば世代間比較（石井、2000）など、異なる常識を持っていると思われる集団間の比較も有益と考える。いずれにしても今日の社会変化の速度、さらには加速度を考えると、常識の研究ならびにそれを通じた人と社会の力動的関係のさらなる理解は急務であろう。

引用文献

- Abraham, W. 1958 *Common sense about gifted children*. New York: Harper.
- Asch, S.E. 1951 Effects of group pressure upon the modification and distortion of judgements. In H. Guetzkow (Ed.), *Groups, leadership and men; research in human relations* (pp. 177-190). Oxford, England: Carnegie Press.
- Bacon, S.D. 1987 Alcohol problem prevention: A "common sense" approach. *Journal of Drug Issues*, **17**, 369-393.
- Beecher, W. 1949 The common sense of sex education. *Individual Psychology Bulletin*, **7**, 12-14.
- Bosveld, W., Koomen, W., van-der-Pligt, J., & Plaisier, J.W. 1995 Differential construal as an explanation for false consensus and false uniqueness effects. *Journal of Experimental Social Psychology*, **31**, 518-532.
- Bridgman, P.W. 1955 Science and common sense. *Etching*, **12**, 265-277.
- Brook, D.J. 1982 Behaviour modification and teachers' "common sense" practices. *Educational Psychology*, **2**, 313-316.
- Bross, I.D.J. 1955 Therapy for intellectual obesity or common sense in reducing figures. *American Journal of Obstetrics and Gynecology*, **69**, 372-378.
- Burton, A.M. 1986 Programming common sense: Analytic consequences of Heider's naive analysis of action. *Human Relations*, **39**, 725-744.
- Carpenter, W.T. 1991 Psychopathology and common sense. *Biological Psychiatry*, **29**(8), 735-737.
- Chappell, M.N. 1938 *In the name of common sense: worry and its control*. New York: Macmillan.
- Clifford, M.M. 1976 Are common sense decisions deterring learning? *British Journal of Educational Psychology*, **46**, 48-56.
- Colby, K.M., Gould, R.L., Aronson, G., & Colby, P.M. 1991 A model of common-sense reasoning underlying intentional non-action in stressful interpersonal situations and its application in the technology of computer-based psychotherapy. *Journal of Intelligent Systems*, **1**, 259-272.
- Cory, D. 1934 Realism of common sense. *Journal of Philosophy*, **31**, 373-377.
- Cory, D. 1937 The cardinal tenets of common sense. *Journal of Philosophy*, **34**, 533-541.
- Derksen, M. 1997 Are we not experimenting then? The rhetorical demarcation of psychology and common sense. *Theory and Psychology*, **7**, 435-456.
- Deutsch, K.W. 1959 The limits of common sense. *Psychiatry: Journal for the Study of Interpersonal Processes*, **22**, 105-112.
- Diefenbach, M.A., & Leventhal, H. 1996 The common-sense model of illness representation: Theoretical and practical considerations. *Journal of Social Distress and the Homeless*, **5**, 11-38.
- Dodd, F.H. 1933 *Common-sense psychology and the home*. London: Allen and Unwin.
- Duval, T.S. & Silvia, P.J. 2002 Self-awareness, probability of improvement, and the self-serving bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 49-61.
- Duval, S. & Wicklund, R.A. 1972 *A theory of objective self-awareness*. New York: Academic Press.
- Errera, P. 1968 Common-sense approaches to confidentiality. *Hospital and Community Psychiatry*, **19**, 347-349.

- Fletcher, G. J. 1984 Psychology and common sense. *American Psychologist*, **39**, 203-213.
- Furnham, A. 1988 *Lay theories: Everyday understanding of problems in the social sciences*. Oxford, England Pergamon Press, Inc.
- Furnham, A. 1994 The psychology of common sense. In J. Siegfried (Ed.), *The status of common sense in psychology* (pp. 259-278). Norwood, NJ: Ablex Publishing Corp.
- Garfinkel, H. 1963 A conception of, and experiments with, "trust" as a condition of stable concerted actions. In O. J. Harvey (Ed.), *Motivation and Social Interaction: Cognitive Determinants* (pp.187-238). New York: Ronald Press.
- Garfinkel, H. 1967 *Studies in ethnomethodology*. Cambridge, England: Polity Press.
- Gillick, M. R. 1985 Common-sense models of health and disease. *New England Journal of Medicine*, **313**, 700-703.
- Goffman, E. 1974 *Frame analysis*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Hall, B. J. & Noguchi, M. 1995 Engaging in Kenson: An extended case study of one form of "common" sense. *Human Relations*, **48**, 1129-1147.
- Hall, E. T. 1966 *The hidden dimension*. New York: Doubleday & Company Inc. (日高敏隆・佐藤信行訳 1970 かくれた次元 みすず書房)
- 濱口恵俊 1998 日本研究原論「関係体」としての日本人と日本社会 有斐閣
- Hardin, C. D. & Higgins, E. T. 1996 Shared reality: How social verification makes the subjective objective. In R. M. Sorrentino & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of motivation and cognition, Vol. 3: The interpersonal context* (pp. 28-84). New York: The Guilford Press.
- 橋本仁司 1984 ルール破りへの追従行動—2つのフィールド実験— 日本グループ・ダイナミックス学会第32回大会発表論文集, 81-82.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley. (大橋正夫訳 1978 対人関係の心理学 誠信書房)
- Higgins, E. T. 1992 Achieving "shared reality" in the communication game: A social action that creates meaning. *Journal of Language and Social Psychology*, **11**, 107-131.
- Higgins, E. T. 1999 "Saying is believing" effects: When sharing reality about something biases knowledge and evaluations. In L. L. Thompson & J. M. Levine (Eds.), *Shared cognition in organizations: The management of knowledge. LEA's organization and management series* (pp.33-48). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- Higgins, E. T. 2000 Social cognition: Learning about what matters in the social world. *European Journal of Social Psychology*, **30**, 3-39.
- Hoffart, A. 1983 A psychological theory must make us see something new: A rejection of common sense explications as scientific theory. *Tidsskrift for Norsk Psykologforening*, **20**, 211-214.
- Hollander, E. P. 1958 Conformity, status, and idiosyncrasy credit. *Psychological Review*, **65**, 117-127.
- Isaacs, A. F. 1950 Giftedness, the Greeks and common sense judgement. *Gifted Child Quarterly*, **15**, 64-68.
- 石井 徹 1992 試案情報基礎論 島根大学法文学部紀要文学科編, **17**, 19-36.
- 石井 徹 1996 Garfinkel (1963) の社会心理学的概説 島根大学法文学部紀要社会システム学科編, **1**, 15-36.
- 石井 徹 1997 集合現象としての流言 広瀬幸雄編著 シミュレーション世界の社会心理学—ゲームで解く葛藤と共存— 第11章 (pp. 171-184) ナカニシヤ出版
- 石井 徹 1998 常識の静態 (2) 日本社会心理学会第39回大会発表論文集, 214-215.
- 石井 徹 1999a CG迷路における基本ルールの推移 社会心理学研究, **14**(2), 57-68.
- 石井 徹 1999b 常識のずれ (1) ふつうの中学生像をめぐって 日本心理学会第63回大会発表論文集, 992.
- 石井 徹 1999c 常識のずれ (2) ふつうの高校生像をめぐって 日本社会心理学会第40回大会発表論文集, 206-207.
- 石井 徹 2000 変わりゆく「ふつう」について

石井: 常識の規範的影響について

- て 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 370-371.
- 石井 徹 2001a 常識の境界 社会心理学研究, **16**, 133-146.
- 石井 徹 2001b 企業の販売戦略にみる受け入れ可能な生活変化量; 常識変容メカニズムに関する一考察 島根大学法文学部紀要社会システム学科編 (経済科学論集), **5**, 1-28.
- 石井 徹 2002 うれしさの表出における常識の影響課程 島根大学法文学部紀要社会システム学科編, **7**, 1-20.
- Jackson, J. M. 1960 Structural characteristics of norms. In G. E. Jensen (Ed.), *Dynamics of Instructional Groups*. Chicago: University of Chicago Press. (末吉悌次・片岡徳雄・森しげる訳 1967 学習集団の力学 黎明書房)
- 柿崎祐一 1974 知覚判断 八木 冕監修 現代の心理学 培風館
- 片桐雅隆 1993 シュッツの社会学 いなほ書房
- 唐沢 穂 1997 集団間に生ずる認知過程 広瀬幸雄編著 シミュレーション世界の社会心理学—ゲームで解く葛藤と共存— 第3章 (pp. 40-54) ナカニシヤ出版
- 河合綾子・唐沢 穂 2001 集団間関係と共有的リアリティー 日本社会心理学会第42回大会発表論文集, 294-295.
- Kelley, H. H. 1967 Attribution theory in social psychology. In D. Levine (Ed.), *Nebraska Symposium on Motivation: Vol. 15* (192-238). Lincoln: University of Nebraska Press.
- Kelley, H. H. 1992 Common-sense psychology and scientific psychology. *Annual Review of Psychology*, **43**, 1-23.
- 菊池雅子・渡邊席子・山岸俊男 1997 他者の信頼性判断の正確さと一般的信頼—実験研究 実験社会心理学研究, **37**, 23-36.
- 木下富雄 1981 流言伝達のモデル 三隅二不二・木下富雄(編) 現代社会心理学の発展 I (pp. 240-259) ナカニシヤ出版
- 木下富雄 1994 現代の噂から口頭伝承の発生メカニズムを探る—「マクドナルド・ハンバーガー」と「口裂け女」の噂 木下富雄・吉田民人(編) 記号と情報の行動科学 (応用心理学講座 4) (pp. 45-97) 福村出版
- 木下富雄・林 春男 1991 社会的ルールの構造 木下富雄・棚瀬孝雄(編) 法の行動科学 (応用心理学講座 5) (pp. 22-51) 福村出版
- 北山 忍 1997 文化心理学とは何か 柏木恵子・北山 忍・東洋(編著) 文化心理学 (pp. 17-43) 東京大学出版会
- 北山 忍・唐澤真弓 1995 自己: 文化心理学的視座 実験社会心理学研究, **35**, 133-163.
- Kromsky, D. F. & Cutler, B. L. 1989 The battered woman syndrome: A matter of common sense? *Forensic Reports*, **2**, 173-186.
- Laor, N. 1984 Common sense ethics and psychiatry. *Psychiatry: Journal for the Study of Interpersonal Processes*, **47**, 135-150.
- Latané, B. & Darley, J. M. 1970 *The unresponsive bystander: Why doesn't he help?* New York: Appleton-Century-Crofts. (竹村研一・杉崎和子訳 1977 冷淡な傍観者: 思いやりの心理学 ブレーン出版)
- Lenat, D., Prakash, M., & Shepherd, M. 1986 CYC: Using common sense knowledge to overcome brittleness and knowledge acquisition bottlenecks. *AI Magazine*, **6**, 65-85.
- Leventhal, H., Diefenbach, M., & Leventhal, E. A. 1992 Illness cognition: Using common sense to understand treatment adherence and affect cognition interactions. *Cognitive Therapy and Research*, **16**, 143-163.
- Levine, J. M., Higgins, E. T., & Choi, H. S. 2000 Development of strategic norms in groups. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, **82**, 88-101.
- Luhmann, N. 1968 *Vertrauen: Ein Mechanismus der Reduktion sozialer Komplexität*. Ferdinand Enke Verlag, Stuttgart. (野崎和義・土方 透訳 1988 信頼—社会の複雑性とその縮減 未来社)
- Martin, R., Gordon, E. E. I., & Lounsbury, P. 1998 Gender disparities in the attribution of cardiac-related symptoms: Contribution of common sense models of illness. *Health Psychology*, **17**, 346-357.
- 松田道広 1988 ミステリ作家のたくらみ 筑摩書房
- Melton, G. B. 1997 Why don't the knuckleheads use common sense? In S. W. Henggeler & A. B. Santos (Eds.), *Innovative approaches for difficult-to-treat populations* (pp. 351-370). Washington, D.C.: American

- Psychiatric Press, Inc.
- Menninger, K. 1930 *The human mind*. New York: Alfred A. Knopf, Inc.
- Milgram, S. 1974 *Obedience to authority: An experimental view*. New York: Harper & Row Publishers, Inc. (岸田 秀訳 1980 服従の心理—アイヒマン実験 河出書房新社)
- Milgram, S. 1977a The experience of living in cities. In S. Milgram (Ed.), *The individual in a social world* (pp. 24-41). Reading, MA: Addison-Wesley.
- Milgram, S. 1977b Crowds In S. Milgram (Ed.), *The individual in a social world*. (pp. 206-274). Reading, MA: Addison-Wesley.
- Miller, D. T. & Prentice, D. A. 1994 Collective errors and errors about the collective. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **20**, 541-550.
- Morris, D. 1977 *Man watching*. Oxford, England: Elsevier International Projects Ltd., in co-operation with Jonathan Cape Ltd., London. (藤田 統訳 マンウォッチング 1980 小学館)
- Moscovici, S. 1981 On Social Representations. In J. P. Forgas (Ed.), *Social cognition: Perspectives on everyday understanding* (pp. 181-209). London: Academic Press.
- Moscovici, S. & Faucheux, C. 1972 Social influence, conformity bias, and the study of active minorities. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, **6** (pp. 149-202). Academic Press.
- Noelle-Neumann, E. 1980 *Die Schweigespirale öffentliche Meinung—unsere soziale Haut*. Frankfurt/Main Berlin: Verlag Ullstein GmbH. (池田謙一・安野智子訳 1997 沈黙の螺旋理論 世論形成過程の社会心理学 改訂版 ブレーン出版)
- 岡 隆 2001 フォールス・コンセンサス効果 山本真理子・外山みどり・池上知子・遠藤由美・北村英哉・宮本聡介編 社会的認知ハンドブック (pp. 204-205) 北大路書房
- Osberg, T. M. 1993 Psychology is not just common sense: An introductory psychology demonstration. *Teaching of Psychology*, **20**, 110-111.
- Park, E. 1998 Individualism/collectivism, self-concept and social behavior: False-uniqueness and the spiral of silence hypotheses. *Dissertation Abstracts International Section A: Humanities and Social Sciences*, **59**, 1008.
- Parker, R. S. 1973 *Emotional common sense: How to avoid self-destructiveness*. New York: Harper and Row.
- Parker, J. G. & Lacour, J. A. 1997 Common sense in correctional volunteerism in the institution. In A. R. Roberts *et al.* (Eds.), *Social work in juvenile and criminal justice settings* (2nd ed.) (pp. 366-374). Springfield, IL: Charles C Thomas Publisher.
- Pepinsky, P. N. 1994 *Worlds of common sense: Equality, identity, and two modes of impulse management*. Westport, CT: Greenwood Press/Greenwood Publishing Group, Inc.
- Perloff, L. S. & Brickman, P. 1982 False consensus and false uniqueness: Biases in perceptions of similarity. *Academic Psychology Bulletin*, **4**, 475-494.
- Pillay, A. P. 1950 Common-sense therapy of male sex disorders. *International Journal of Sexology*, **4**, 19-22.
- Pillay, A. P. 1952 Common sense therapy of male sex disorders. *International Journal of Sexology*, **6**, 15-20.
- Ramsperger, A. G. 1938 Dualism and common sense. *Philosophical Review*, **47**, 204-209.
- Reilly, J. S. 1935 *Common sense for mothers*. New York: Funk and Wagnalls.
- Rippere, V. 1994 An empirical anthropological method for investigating common sense. In J. Siegfried (Ed.), *The status of common sense in psychology* (pp. 247-258). Norwood, NJ: Ablex Publishing Corp.
- Ritter, W. E. 1944 Logic in our common knowledge, or logic in the light of common sense, common knowledge, and common understanding. *Philosophy of Science*, **11**, 59-81.
- Ross, L., Greene, D., & House, P. 1977 The false consensus effect: An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 279-301.

石井：常識の規範的影響について

- Routh, T. A. 1964 Counseling and common sense. *Personnel Journal*, **43**(10), 558-560.
- 佐野山寛太 2000 現代広告の読み方 文藝春秋
- 佐々木 薫 1982 集団規範の変化に関する研究 三隅二不二・木下富雄(編) 現代社会心理学の発展 I (pp. 151-178) ナカニシヤ出版
- Sato, I. 1991 *Kamikaze Biker: Parody and anomy in affluent Japan*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 佐藤 毅 1990 マスコミの受容理論 言説の異化媒介的変換 叢書「現代の社会科学」法政大学出版局
- Schutz, A. 1953 Common sense and scientific interpretation of human action. *Philosophy and Phenomenological Research*, **14**, 1-39.
- Schwieso, J. 1984 What is common to common sense? *Bulletin of the British Psychological Society*, **37**, 43-45.
- Sherif, M. 1935 A study of some social factors in perception. *Archives of Psychology*, **27**, 1-60.
- Sherif, M. & Hovland, C. I. 1961 *Social judgement: Assimilation and contrast effects in communication and attitude change*. London: Yale University Press. (柿崎祐一監訳 島久洋・水島基喜訳 1977 社会的判断の法則: コミュニケーションと態度変化 ミネルヴァ書房)
- Siegfried, J. 1994 *The status of common sense in psychology*. Norwood, NJ: Ablex Publishing Corp.
- Sigelman, C. K. 1991 Social distance from stigmatized groups: False consensus and false uniqueness effects on responding. *Rehabilitation Psychology*, **36**, 139-151.
- Simplicio, J. S. C. 1999 Some simple and yet overlooked common sense tips for a more effective classroom environment. *Journal of Instructional Psychology*, **26**, 111-115.
- Smedslund, J. 1997 *The structure of psychological common sense*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Sonkin, D. J. 1986 Clairvoyance vs. common sense: Therapist's duty to warn and protect. *Violence and Victims*, **1**, 7-22.
- Sorrentino, R. M. & Roney, C. J. R. 2000 *The uncertain mind: Individual differences in facing the unknown*. Philadelphia: Psychology Press.
- Spock, B. 1946 *The common sense book of baby and child care*. New York: Duell, Sloan and Pearce.
- Sternberg, R. J., Wagner, R. K., Williams, W. M., & Horvath, J. A. 1997 Testing common sense. In D. F. Russ-Eft & H. S. Pre-skill (Eds.), *Human resource development review: Research and implications* (pp. 102-132). Thousand Oaks, CA: Sage Publications, Inc.
- Stevens, W. O. 1953 *Psychics and common sense; an introduction to the study of psychic phenomena*. New York: E. P. Dutton.
- Suls, J. & Wan, C. K. 1987 In search of the false-uniqueness phenomenon: Fear and estimates of social consensus. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 211-217.
- Suls, J., Wan, C. K., & Sanders, G. S. 1988 False consensus and false uniqueness in estimating the prevalence of health-protective behaviors. *Journal of Applied Social Psychology*, **18**, 66-79.
- 竹内靖雄 1995 日本人の行動文法 —「日本らしさ」の解体新書— 東洋経済新報社.
- Toda, M. & Higuchi, K. 1994 Common sense, emotion, and chatting and their roles in interpersonal interactions. In J. Siegfried (Ed.), *The status of common sense in psychology* (pp. 208-244). Norwood, NJ: Ablex Publishing Corp.
- Turner, R. H. 1964 Collective behavior. In R. E. L. Faris (Ed.), *Handbook of modern sociology* (pp. 382-425). Chicago: Rand McNally.
- Turner, R. H. & Killian, L. M. 1957 *Collective behavior*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- 占部敬康・林 理 2002 常識の社会心理 「あたりまえ」は本当にあたりまえか 北大路書房
- Verlhiac, J. F. 1997 Effet de faux consensus et regulation sociale du jugement. *Cahiers Internationaux de Psychologie Sociale*, **36**, 46-61.
- von Bertalanffy, L. 1968 *General system theory; Foundations, development, applica-*

- tions. New York: George Braziller. (長野敬・太田邦昌訳 1973 一般システム理論みすず書房)
- Wagenaar, W. A. 1994 Commonsense problem solving in conditions of underspecification. In J. Siegfried, (Ed.), *The status of common sense in psychology* (pp. 322-345), Norwood, NJ: Ablex Publishing Corp.
- Walls, G. L. 1952 The common-sense horopter. *American Journal of Optometry*, **29**, 460-477.
- Want, J. H. 1983 School-based intervention strategies for school phobia: A ten-step "common sense" approach. *Pointer*, **27**, 27-32.
- Widloecher, D. 1988 Common sense psychology and medical psychology. *Psychologie Medicale*, **20**, 1791-1793.
- Wile, I. S. 1935 Common sense in rearing children for life. *Archives of Pediatrics*, **52**, 749.
- Wistedt, I. 1994 Everyday common sense and school mathematics. *European Journal of Psychology of Education*, **9**, 139-147.
- 山岸俊男 1990 社会的ジレンマのしくみ「自分一人ぐらいの心理の招くもの」サイエンス社
- 山田富秋・好井裕明 1991 排除と差別のエスノメソドロジー —[いま-ここ]の権力作用を解説する 新曜社
- 山田富秋・好井裕明・山崎敬一(編・訳) 1987 エスノメソドロジー: 社会学的思考の解体 ガーフィンケル, H. 他著 せりか書房
- Zimbardo, P. G. 1969 The human choice: Individuation, reason, and order versus deindividuation, impulse, and chaos. In W. J. Arnold & P. Levine (Eds.), *Nebraska Symposium on Motivation: Vol. 17* (237-307). Lincoln, NE: University of Nebraska Press.
- Zimbardo, P. G. 1980 *Essentials of Psychology and life (10th ed.)*. Glenview, Ill: Scott, Foresman. (古畑和孝・平井久(監訳) 1982 現代心理学 サイエンス社)
- (2001年12月19日受稿, 2004年11月4日掲載決定)